

中学校・高等学校教育実習（保健体育）の実施状況と実習生の意識

— 第2報 —

A Study on the Situation of Junior and Senior High School Teaching Practice
(Physical Education) and Students' Consciousness (2)

体育学部体育学科
平田 佳弘
HIRATA, Yoshihiro
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
吉岡 利貢
YOSHIOKA, Toshitsugu
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

岡山県立大学保健福祉学部
京林由季子
KYOUBAYASHI, Yukiko
Department of Health and Welfare Science
Okayama Prefectural University

体育学部体育学科
降屋 丞
FURUYA, Tasuku
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

体育学部体育学科
長谷川晃一
HASEGAWA, Koichi
Department of Physical Education
Faculty of Physical Education

Abstract : In this research, we aim to study improvement of subjects related to teaching practice of junior high school / high school teacher training course (health and physical education). For that purpose, we conducted a questionnaire survey on the implementation status of the current teaching practice and the consciousness of the interns. The most common place of teaching practice was high school. The most common practice period was three weeks. In that case, the average lesson time for the interns was 1.98 hours for “health” and 7.12 hours for “physical education”. The willingness of teaching practice and preparing for teaching practice were higher for experienced students. Also, after the teaching practice, the score I wanted to become an internship teacher went up. Analysis of students' impressions showed that the interns practiced many studies and reflections on student involvement and lesson contents and methods. It seems necessary to increase the opportunity to experience the actual conditions of school workplaces and educational activities.

Keywords : teaching practice, health and physical education, junior high and high school teacher training course

I. はじめに

2017年3月公示の新学習指導要領が今年度より移行期に入り、小学校では2020年度から、中学校では2021年度から、高等学校では2022年度から実施に移され

る。新学習指導要領では、知識の理解の質を高め資質・能力を育む「主体的・対話的で深い学び」が大きな改訂のポイントであり、我が国のこれまでの教育実践の蓄積に基づく授業改善の活性化により、児童生徒の知識の理解の質の向上を図り、これからの時代に求

められる資質・能力を育てていくことが重要とされている。保健体育に関しては、伝統や文化に関する教育に関連し中学校保健体育での武道指導の充実、オリンピック・パラリンピックに関連したスポーツの意義の理解等が小学校体育、中学校保健体育での重要事項として示されているが、これら以外にも、英語、道徳、ICT、特別支援教育などの新たな課題への対応についての理解が求められていよう。

このような学習指導要領の改訂を踏まえ、2016年11月の教育職員免許法の改正に引き続き、2017年11月に教育職員免許法施行規則が公布され（2019年4月施行）、教職課程に関わる科目の大括り化が行われ、教員養成に関する改革の具体的な指針としての教職課程コアカリキュラムが明示されるとともに、教育実践に関する科目の中に、教育実習とともに学校インターンシップ（学校体験活動）が位置づけられた。これらにより、大学の教職課程はこれまで以上に履修内容の充実・改善を図り、実践的指導力のある教員を養成することが求められている。

教職課程において教育実習は、学校の教育活動について教育現場で実際に教員としての職務の一部を実践する科目であり、実践的指導力のある教員を養成する上で核となる科目である。そこで、新学習指導要領および教育職員免許法施行規則に対応した教育実践に関する科目の充実に向けて、筆者ら（2018）は現行の教育実習（保健体育）の実施状況と実習生の意識に関する調査を行っている。その結果、学校教育の現場に触れた経験があることが、実習生の教育実習への意欲、実習準備状況、教員志望度の高さにつながることを推察されている。

II. 目的

本研究では、今後の新学習指導要領および教職コアカリキュラムに対応した中学校・高等学校教職課程（保健体育）の教育実践に関する科目の充実に向けた基礎資料とするため、筆者ら（2018）の調査を踏まえ本学の現行の教職課程における教育実習（保健体育）の実態を明らかにするとともに、実習生の意識について学校教育の現場に触れた経験の有無から検討することを目的とする。

III. 方法

1. 調査対象

IPU環太平洋大学教職課程の「中学校・高等学校教育実習（保健体育）」の2017年度及び2018年度の受講生を対象とした。調査対象286人の内訳を表1に示す。学校教育の現場に触れた経験として、本研究では他校種の教育実習の有無から検討する。調査は「教育実習事後指導」において質問紙調査により実施した。

調査の実施にあたっては、「調査は教育実習の実施状況と実習生の意識について調べ、今後の教員養成カリキュラム検討の参考としていくことを目的としていること」「調査結果は調査研究以外に使われることはなく、調査結果が個人の成績や評価に関係することはないこと」を説明し、同意の場合はwebのフォームに回答を入力するよう依頼した。

表1 調査対象内訳

		実習年度		実習経験		全体 (%)
		2017年度	2018年度	有り	無し	
こども発達	学年	3年	0	0		0
		4年	1	1		2
	合計	1	1	2	0	2 (0.7)
教育経営	学年	3年	0	0		0
		4年	25	22		47
	合計	25	22	46	1	47 (16.4)
体育	学年	3年	99	78		177
		4年	37	23		60
	合計	136	101	16	221	237 (82.9)
全体	学年	3年	99	79		178
		4年	63	45		108
	合計	162	124	64	222	286 (100.0)

2. 調査内容

調査内容は以下の4項目から構成した。

- ① 教育実習実施状況：実習校種、実習期間、授業実施時間数、部活参加日数
- ② 教育実習生の意識：希望進路、実習経験、実習への意欲、実習準備状況、教育実習の肯定感
- ③ 教育実習生の教員志望度
- ④ 教育実習の自己評価：良かった点、反省点、課題

3. 「中学校・高等学校教育実習（保健体育）」および「事前事後指導」の概要

IPU環太平洋大学の中学校・高等学校教員養成課程（保健体育）は、体育学科及び教育経営学科、こども発達学科の学生のうち、保健体育教諭免許状の取得を希望する学生が選択する形となっている。体育学科の学生は、中学校・高等学校の保健体育教諭を主免とし、3年次あるいは4年次に中学校・高等学校教育実習（保健体育）を履修する。教育経営学科の学生は、小学校教諭を主免とし3年次に小学校教育実習を行った後、4年次に副免の中学校・高等学校教育実習（保

健体育)を履修する。こども発達学科も幼稚園教諭を主免とし3年次に幼稚園教育実習を行った後、4年次に副免の中学校・高等学校教育実習(保健体育)を履修することを原則としている。

事前・事後指導は、実習前年度の3月から実習年度の前期から後期まで実施している。これは、教育実習期間が早い場合は5月のゴールデンウィーク明けに始まる学生もいるため、3月から授業を開始し、模擬授業を最低3回程度は実施した上で教育実習に送り出すようにしているためである。事前・事後指導の主な内容は、「教育実習に臨む上での心構え」、「実習手引き使用の仕方」、「実習日誌の書き方」、「実際の教育実習について」、「学習指導案の書き方」までを4時間かけて3月中に行う。このことによって、4月に入り、最初の教育実習事前事後指導の時間から、学生の模擬授業が始められる。学生が模擬授業をして、同じ班の学生・担当教員がその授業の評価をし、よりよい授業の仕方を指導している。1班の学生数は、担当教員1人に対して12~13人であり、1時間に3人~4人が模擬授業を行い、授業担当者が指導して行く形である。担当教員は、教育実習期間が最も遅い学生が実習に向かうまで事前指導を行っている。さらに7月中旬には、7月上旬までに教育実習を終えた学生を集め、教育実習の振り返りと事後指導を実施している。後期は、教育実習が最も遅い学生が11月下旬であるため、12月中旬に後期教育実習を終えた学生を集めて、事後指導を行っている。

IV. 結果

1. 中学校・高等学校教育実習(保健体育)の実施状況

(1) 実習校種と実習期間

2017年度と2018年度の実習校種と実施期間は表2に示す通りであった。全体では、実習校は高等学校が70.6%と最も多く、次いで中学校26.2%、中高一貫校が3.1%であった。実習期間は3週間が69.2%を占めていた。

(2) 授業実施時間数

表3-1、表3-2は、実習生が担当した「保健」と「体育」の授業実施時間数を、実習期間と校種別に整理したものである。「保健」授業の実施時間数の平均は、実習期間2週間では3.9時間、3週間では4.5時間、4週間では5.6時間であり、「体育」授業の実施時間数の平均は、実習期間2週間では12.1時間、3週間

では16.3時間、4週間では23.5時間であった。「保健」「体育」とも授業実施時間数が0時間の実習生がいる一方で、「保健」では2週間で15時間、「体育」においては2週間で30時間、3週間で45時間、4週間で60時間の授業を実施するなど、実習校により極端な違いが見られた。実習校の置かれている状況にもよるが、特に高校(私立)と中高一貫校では授業実施時間数が高校(公立)や中学校(国公立)よりも多い傾向が見られた。

(3) 部活動参加日数

部活動の参加日数を、実習期間と校種別に整理したものである。部活動参加日数の平均は、実習期間2週間では8.79日、3週間では11.34日、4週間では16.90日であった。部活動への参加がない実習生から毎日参加している実習生まで、部活動への参加日数は実習校により様々であったが、ほとんどの実習生(94.8%)は1日以上部活動に参加していた。

2. 実習生の意識

(1) 希望進路

実習生の希望進路は、全体では教員(保健体育)希望が37.1%と最も多く、次いで、企業25.9%、教員(小学校)19.9%、公務員13.3%、その他3.8%であった。教員志望は全体で57.0%(163人)であったが、体育学科では保健体育教員(41.8%)と企業(29.1%)が多く、教育経営学科では、小学校教員(73.9%)が多かった。こども発達学科は全員が保健体育教員希望であった。

(2) 実習への意欲

実習への意欲について「1:意欲がない」~「10:意欲がある」の10段階の評定尺度による回答を求めた。全体の回答では、「10」が47.1%と最も多く、次いで「8」19.9%、「9」16.57%であり、得点の平均値は8.68(SD=1.80)であった。教育経営学科の平均値9.21は体育学科の平均値8.56よりも有意に高かった($t=-2.900$, $df=88.492$, $p<0.01$)。また、教員志望の

表2 実習校種と実習期間

		2週間	3週間	4週間	計	(%)
高等学校	2017年度	14	75	20	109	
	2018年度	7	63	23	93	
	計	21	138	43	202	(70.6)
中学校	2017年度	1	33	12	46	
	2018年度	6	20	3	29	
	計	7	53	15	75	(26.2)
中高一貫校	2017年度		6	1	7	
	2018年度		1	1	2	
	計		7	2	9	(3.1)
全体	2017年度	15	114	33	162	
	2018年度	13	84	27	124	
	計	28	198	60	286	
		(%)	(9.8)	(69.2)	(21.0)	(100.0)

表3-1 授業実施時間数 (保健)

実習期間	校種	平均値	人数	SD	最小値	最大値
2週間	高校 (公立)	3.2	14	2.04	0.0	8.0
	高校 (私立)	6.6	7	4.58	2.0	15.0
	中学校 (公立)	2.6	7	2.51	0.0	7.0
	合計	3.9	28	3.26	0.0	15.0
3週間	高校 (公立)	4.6	106	2.67	0.0	18.0
	高校 (私立)	6.0	32	4.86	0.0	20.0
	中学校 (公立)	3.3	52	3.93	0.0	15.0
	中学校(国立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (公立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (私立)	5.8	6	4.62	3.0	15.0
合計	4.5	198	3.59	0.0	20.0	
4週間	高校 (公立)	5.1	32	2.69	2.0	12.0
	高校 (私立)	9.4	11	4.23	2.0	18.0
	中学校 (公立)	3.3	15	4.82	0.0	18.0
	中高一貫 (私立)	10.0	2	2.83	8.0	12.0
合計	5.6	60	4.15	0.0	18.0	
合計	高校 (公立)	4.6	152	2.65	0.0	18.0
	高校 (私立)	6.8	50	4.80	0.0	20.0
	中学校 (公立)	3.2	74	3.97	0.0	18.0
	中学校(国立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (公立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (私立)	6.9	8	4.49	3.0	15.0
合計	4.7	286	3.71	0.0	20.0	

表3-2 授業実施時間数 (体育)

実習期間	校種	平均値	人数	SD	最小値	最大値
2週間	高校 (公立)	12.1	14	5.19	0.0	20.0
	高校 (私立)	14.9	7	9.97	3.0	30.0
	中学校 (公立)	9.1	7	8.88	3.0	24.0
	合計	12.1	28	7.54	0.0	30.0
3週間	高校 (公立)	17.2	106	9.89	0.0	43.0
	高校 (私立)	17.8	32	13.67	0.0	50.0
	中学校 (公立)	12.3	52	8.69	0.0	35.0
	中学校(国立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (公立)	25.0	1		25.0	25.0
	中高一貫 (私立)	25.5	6	8.73	12.0	37.0
合計	16.3	198	10.58	0.0	50.0	
4週間	高校 (公立)	23.0	32	14.86	2.0	56.0
	高校 (私立)	31.6	11	18.40	5.0	60.0
	中学校 (公立)	17.3	15	15.70	0.0	60.0
	中高一貫 (私立)	32.0	2	33.94	8.0	56.0
合計	23.5	60	16.62	0.0	60.0	
合計	高校 (公立)	18.0	152	11.16	0.0	56.0
	高校 (私立)	20.5	50	15.38	0.0	60.0
	中学校 (公立)	13.0	74	10.58	0.0	60.0
	中学校(国立)	3.0	1		3.0	3.0
	中高一貫 (公立)	25.0	1		25.0	25.0
	中高一貫 (私立)	27.1	8	15.10	8.0	56.0
合計	17.4	286	12.30	0.0	60.0	

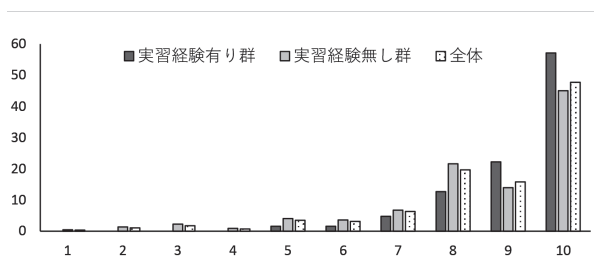


図1 実習への意欲

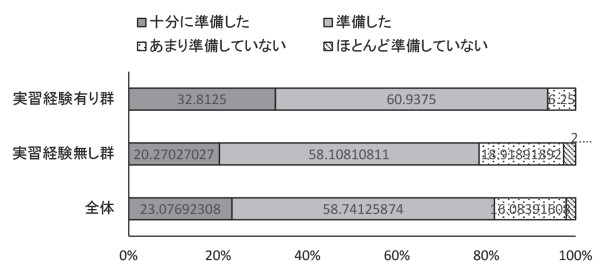


図2 実習準備状況

実習生の平均値は8.99であり、教員志望でない実習生の平均値8.27よりも有意に高く ($t=3.318, df=231.788, p<0.01$)、実習経験有り群の平均値は9.24と高く、実習経験無し群の平均値8.52よりも有意に高かった ($t=3.774, df=174.782, p<0.01$)。

(3) 実習準備状況

実習準備状況について「1：ほとんど準備していない」～「4：十分に準備した」の4段階の評定尺度による回答を求めた。全体の回答は、「ほとんど準備していない」2.1%、「あまり準備していない」15.6%、「準備した」58.8%、「十分に準備した」23.5%であり、全体の得点の平均値は3.03 (SD=0.69) であり、学科別では教育経営学科の平均値3.30が体育学科の平均値2.97よりも有意に高かった ($t=-3.013, df=282, p<0.01$)。また、教員志望の実習生の平均値は3.11であり、教員志望でない実習生の平均値2.92よりも有意に高く ($t=-2.344, df=284, p<0.05$)、実習経験有り群の平均値は3.27と高く、実習経験無し群の平均値2.96よりも有意に高かった ($t=3.176, df=284, p<0.01$)。

(4) 教育実習の肯定感

教育実習の肯定感を、実習に行って「1：良くなかった」、「2：よかった」、「3：非常に良かった」の3段階の評定尺度による回答を求めた。全体の85.7%が「非常に良かった」と回答し、次いで「良かった」13.6%、「良くなかった」0.7%であり、全般的に高い肯定感を示していた。

3. 教育実習生の教員志望度

教育実習の事前と事後に、教員志望度を「1：全くない」～「10：非常にある」の10段階の評定尺度により回答を求め、実習の前後で得点に変化があったかどうかを検証した (図3-1, 図3-2)。

教育実習の前では、全体の平均値は6.08 (SD=3.18) であった。学科別では、教育経営学科 (平均値8.43) は体育学科の平均値5.59よりも有意に高かった ($t=-5.928, df=282, p<0.01$)。教員志望の実習生の平均値7.89は、教員志望でない実習生の平均値3.69よりも有意に高く ($t=-14.592, df=284, p<0.01$)、実習経験有り群の平均値8.02も、実習経験無し群の平均値5.53よりも有意に高かった ($t=5.824, df=284, p<0.01$)。

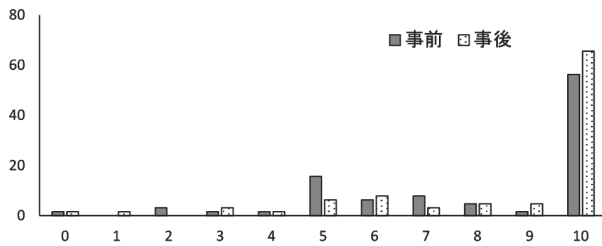


図3-1 教員志望度の変化
(実習経験有り群)

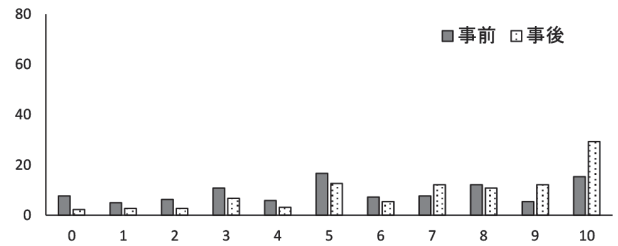


図3-2 教員志望度の変化
(実習経験無し群)

教育実習の事後では全体の回答の平均値は7.42 (SD=2.80) であり、実習前の平均値とは統計的に有意な差が認められ、実習後に得点が上昇していることが確かめられた ($t=-8.743$, $df=285$, $p<0.01$)。また、学科、教員志望の有無、実習経験の有無のすべての群で教育実習後に教員志望度の得点の平均値は有意に上昇していた。

4. 教育実習の自己評価

2018年度実習生について、教育実習の自己評価について①良かったところ、②反省すべきところ、③課題の3点から自由記述の回答を求めた。こども発達学科1人、教育経営学科22人、体育学科103人の計126人から回答を得た。回答内容の分析にはデータマイニングソフトKH Coder 3を用いた(樋口ら, 2014)。

(1) 実習で良かったところ(頑張った、自信がついた、分かるようになった等)

自由記述の回答をKH Coderによる前処理を実行し単純集計を行った結果、197の文が確認された。総抽出語数は4461語、異なり語数は672語であった。これらから頻出語を抽出し、出現数が10以上の語を表4-1に、上位60語の共起ネットワークを図4に示した。また、実習経験あり群と実習経験なし群それぞれを特徴づける語を抽出し、上位10語を表4-2に示した。

頻出語上位の「生徒」「授業」は、共起ネットワークでは「自信、自分、考える、思う」などの13語で繋がりを作っていた。これらの語は以下のような文脈で用いられていた。

- ・いかにして生徒に楽しんで授業を受けてもらうかを考え、実行したこと
- ・生徒を引きつける教材の研究や声掛けの実践など、いかに生徒を意欲的に乗せることができるか考えた
- ・生徒の立場になって教えることで生徒自身ができなかったことができるようになったので私も自信がついた

実習経験有り群の特徴語である「コミュニケーション」は「取る」と繋がっていた。

・自分から積極的にコミュニケーションを取りに行くことでより良い関係を築くことができた

・生徒とのコミュニケーションでは、初めは全く話しかけてくれなかったので、色々な方法で試した

実習経験無し群の特徴語である「話す」は「人前」と、「頑張る」は「教材、研究、準備」などの9語で繋がりを作っていた。

- ・人前で話せる自信が付いた
 - ・人前で話すことやそれを伝えることの難しさを感じた
 - ・教材研究を積極的に頑張った
 - ・授業準備は頑張った。教科書には載っていない知識等を調べ、それを授業に取り入れるようにした
 - ・生徒と積極的に関わろうとすることを頑張った
- 実習経験有り群では、授業の中での生徒との関わりや授業外での生徒と積極的に関わることで、生徒の頑張りに気付いたり、生徒が取り組めるような工夫ができたたりしたことを自身の実習を評価している様子が見られた。実習経験無し群では、実習生が人前で話しをする経験ができたことや、教材研究をしたことなど、自分の頑張りを評価している傾向が強いことに特徴が見られた。

(2) 実習で反省すべきところ(うまくいかなかった、難しかった、悩んだ等)

自由記述の回答をKH Coderにより単純集計を行い、195の文が確認され総抽出語数4173語、異なり語数663語が得られた。出現数が10以上の頻出語を表5-1に、上位60語の共起ネットワークを図5に示す。また、実習経験有り群と実習経験無し群それぞれに特徴的な語(上位10語)を表5-2に示す。

頻出語の「授業」「生徒」「難しい」「思う」「感じる」は5語で1つの繋がりを作っていた。

- ・授業づくりが難しく、なにを学ばせるかといったことを考えるのが難しかった
- ・授業をする際の、ルールや視覚的に見えるようにホワイトボードに書く工夫が難しかった

表4-1 「良かったところ」頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
生徒	90	関わる	13
授業	85	前	13
話す	30	分かる	13
思う	27	コミュニケーション	12
自信	26	研究	12
人前	25	指導	12
考える	21	保健	12
自分	20	話	12
頑張る	18	時間	11
先生	18	積極	11
たくさん	15	教材	10
実習	14	対応	10
良い	14		

表4-2 「良かったところ」実習経験別の特徴語

実習経験有り		実習経験無し	
生徒	0.293	授業	0.333
思う	0.176	話す	0.150
自信	0.130	人前	0.140
考える	0.110	頑張る	0.102
自分	0.110	前	0.090
分かる	0.106	研究	0.082
コミュニケーション	0.090	良い	0.082
関わる	0.090	保健	0.074
実習	0.087	たくさん	0.073
指導	0.075	教材	0.067

※数値はJaccardの類似性測度

表5-1 「反省」頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
授業	91	感じる	15
生徒	62	考える	15
難しい	35	説明	14
思う	27	多い	14
時間	20	実習	13
準備	20	板書	12
指導	18	保健	12
体育	18	伝える	11
自分	17	先生	10

表5-2 「反省」の実習経験別の特徴語

実習経験有り	実習経験無し		
生徒	0.214	難しい	0.181
授業	0.208	指導	0.100
思う	0.113	準備	0.099
体育	0.108	自分	0.093
考える	0.098	板書	0.080
時間	0.094	実習	0.072
研究	0.088	多い	0.071
感じる	0.078	説明	0.057
教材	0.071	先生	0.050
対応	0.071	出来る	0.044

※数値はJaccardの類似性測度

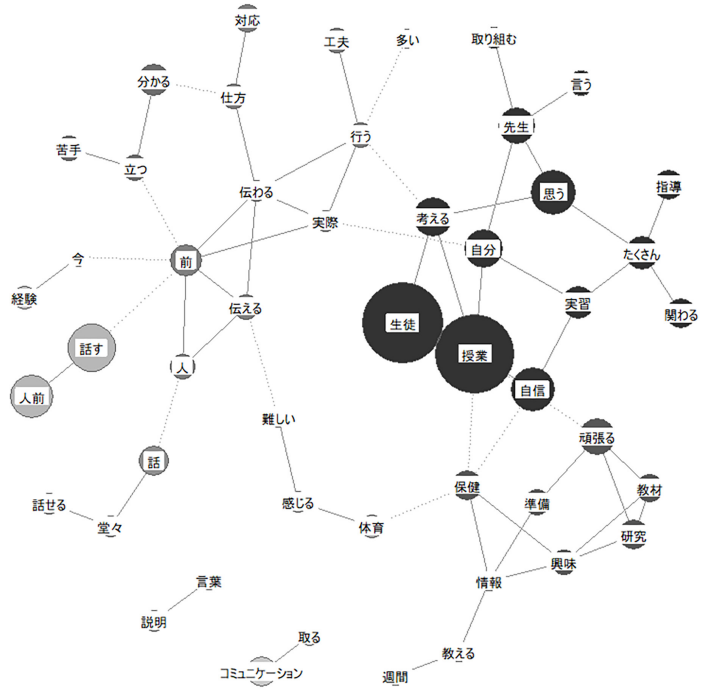


図4 共起ネットワーク (良かったところ)

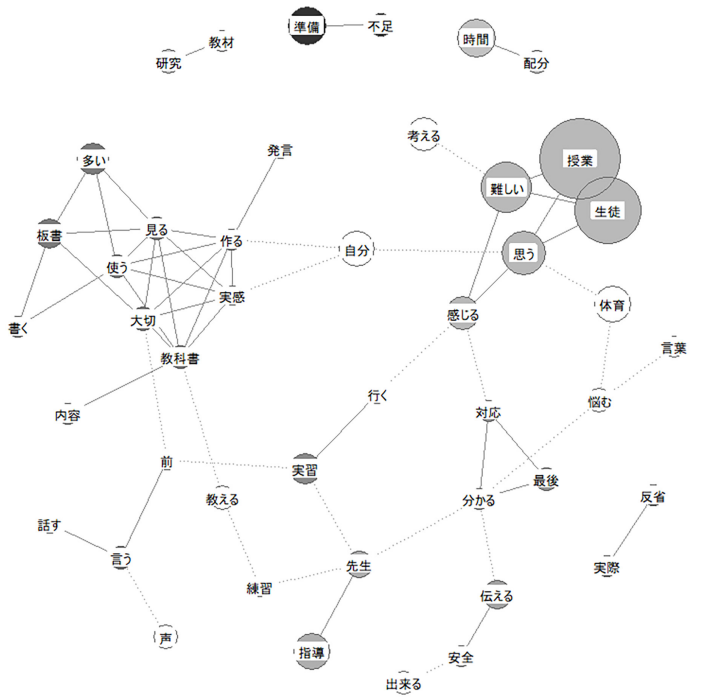


図5 共起ネットワーク (反省すべきところ)

表6-1 「課題」頻出語

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
思う	52	教材	16
生徒	52	話す	16
授業	50	コミュニケーション	15
自分	45	指導	15
感じる	36	研究	13
知識	22	時間	12
準備	21	言葉	11
考える	20	行う	11
大切	20	教員	10
伝える	19	見る	10
課題	18	持つ	10

表6-2 「課題」の実習経験別の特徴語

実習経験有り		実習経験無し	
授業	0.291	コミュニケーション	0.077
生徒	0.225	話す	0.064
感じる	0.195	教員	0.048
自分	0.159	必要	0.047
思う	0.155	相手	0.042
行う	0.106	改善	0.041
指導	0.105	見る	0.041
教材	0.100	今後	0.041
準備	0.097	持つ	0.041
考える	0.095	人	0.041

※数値はJaccardの類似性測度

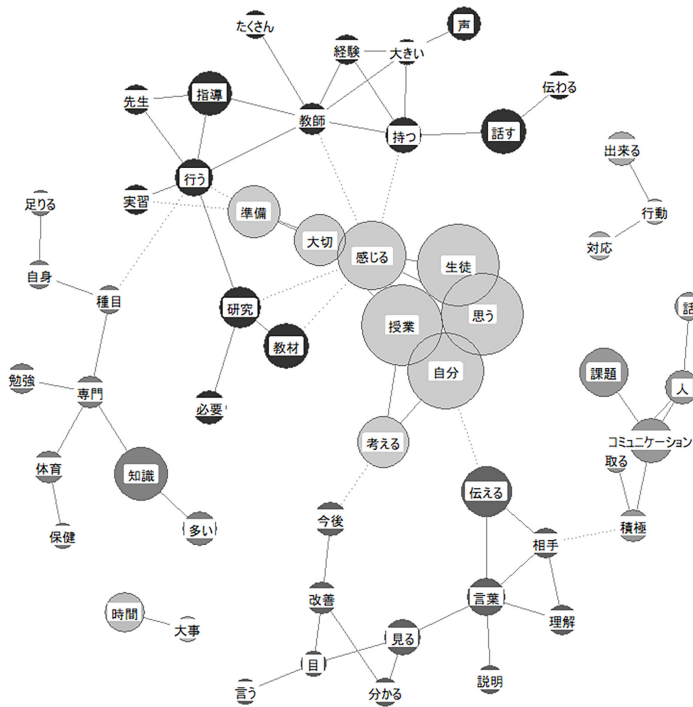


図6 共起ネットワーク（課題）

・授業を聞いてない生徒の対応が難しかった
 実習経験有り群の特徴語である「体育」は、「悩む、言葉」の3語で繋がりを持っていた。

- ・時間配分が体育も保健も悩んだ
- ・体育の実技でどういふ発問をすれば、どういふ言葉を使えば、生徒から言葉を引き出せるのかとても悩みました

実習経験無し群の特徴語である「指導」は「先生」と繋がり、「準備」は「不足」と繋がっていた。

- ・指導担当の先生に自分が何をやりたいかなどの思いを伝えることが難しかった
- ・準備面で不十分なことが多く授業でうまくできなかった

実習経験有り群では、具体的な授業内容・方法を実践することの難しさや、配慮が必要な生徒への関わり方などを、実習経験無し群では授業準備が不十分であったことを反省点とする傾向にあった。

(3) 実習で明らかになった自分自身の課題

自由記述の回答をKH Coderによる前処理を実行し単純集計を行った結果、233の文が確認された。総抽出語数は4682語、異なり語数は702語であった。出現数が10以上の頻出語を表6-1に、上位60語の共起ネットワークを図6に示す。また、実習経験あり群と

実習経験無し群それぞれに特徴的な語（上位10語）を表6-2に示す。

頻出語の「思う」「生徒」「授業」「自分」「考える」「大切」「準備」は、共起ネットワークでは1つのネットワークを作っており、以下のような文脈で用いられていた。

- ・授業を行うためにはやはり準備がなによりも大切で、教師自身がその教科、種目について多くの知識を持っておくこと
- ・教材研究をする時に頭の中でもっと生徒の反応や動きを想像しながらやっていく必要がある
- ・生徒が学ぶために、しっかりとした指示や指導ができるようになること
- ・生徒との交流を増やし、授業で多くの会話が出来るような環境づくりをする

実習経験有り群の特徴語である「指導」は、「教師、話す、伝わる、行う、研究、教材」などの15語で繋がっていた。

- ・生徒が楽しむための、生徒が学ぶために、しっかりとした指示や指導ができること
- ・一人一人の特徴を踏まえて指導することが難しかったので、臨機応変に声をかけたり、指導できるようになること

・教員を目指すうえで、指導力やコミュニケーション能力をもっと身につけること

実習経験無し群の特徴語である「コミュニケーション」は「積極、取る」など6語で繋がりが多かった。

・積極的にコミュニケーションを取りに行くことができるようになること

・先生方とコミュニケーションをとること

実習経験有り群では、授業内容や授業方法について、教材研究や生徒との関係づくりなど様々な視点から取り組んでいくことを課題としており、実習経験無し群では、積極的に生徒や教職員とのコミュニケーションができることを課題としていることが分かる。

このように、実習生の自由記述による自己評価の分析からは、中学校・高等学校の教育実習（保健体育）以前の他校種の実習経験の有無により記述の観点にそれぞれの特徴が見られ、実習生の学びの質に違いがあることが推察された。

V. 考察

本研究では、本学における中学校・高等学校の教育実習（保健体育）の実施状況について明らかにするとともに、実習生の意識について、特に他校種の実習経験の有無から検討した。

本学での教育実習（保健体育）実施状況であるが、校種では高等学校（公立・私立）が70.6%と最も多く、実習期間は3週間が69.2%と多くを占めていた。実習生が実施した授業時間数は、実習期間3週間の場合、「保健」が4.5時間、「体育」が16.3時間であった。しかしながら、実習校によっては30時間、45時間と極端に多い場合も見られるため事前指導において留意する必要がある。部活動については、ほとんどの実習生が参加しており、部活動を通して生徒の指導や生徒との交流を経験していることが明らかとなった。

実習生の意識については、教育実習への意欲、実習準備状況、実習前の教員志望度、実習後の教員志望度の各尺度において実習経験の有無により違いが生じていた。これは、他校種の教育実習経験者は、副免として中学校・高等学校教育実習（保健体育）を履修している教育経営学科やこども発達学科の実習生が多くを占めていることが関係している。つまり、成績等の学修状況が副免の履修条件となっているため、教職への意識が非常に強い学生が集まっているためである。しかしながら、教育実習の自己評価の分析からは、教育実習の経験がある学生とない学生で、異なる観点が見

られることから、すでに教育現場で実際に実習生として職務の一部を実践する経験をしていることが、次の教育実習への明確な目的意識や態度の形成につながっているものと考えられる。また、他校種の教育実習の経験の有無に関わらず、実習前後での教員志望度の得点が上昇することからも、学校教育の現場に触れる経験が教職への意欲を高めることにつながっていると推察される。教育実習以前に授業観察や児童・生徒との交流などで学校現場や教職に触れる具体的体験を、教職課程全体の中で早くから作っていくことが臨まれよう。

今後は、教育実習での実習生の学びや課題の質的分析をさらに進め、そこでの課題を踏まえつつ教育実習の事前事後指導の内容や方法についても実証的検証を行う必要がある。

引用・参考文献

- 中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（答申）。
- 林園子・永木耕介他（2016）法政大学スポーツ健康学部における教職課程の現状と課題：「教育実習」と「保健体育科教育法」の評価に着目して。法政大学スポーツ健康学研究 7, 21-29.
- 平野俊英（2012）愛知教育大学の主免実習における到達目標の構築に向けて－学生の学びの実態から考える－。愛知教育大学教育創造開発機構紀要, 2, 1-7.
- 平田佳弘・京林由季子・吉岡利貢 他（2018）中学校・高等学校教育実習（保健体育）の実習状況と実習生の意識。環太平洋大学研究紀要 12, 177-182.
- 樋口耕一（2014）社会調査のための計量テキスト分析－内容分析の継承と発展を目指して－。ナカニシヤ出版。
- 家田重晴・空子耕一他（2017）教育実習指導の評価および教職への意欲と適性の自己評価に関する経年変化体育学部・スポーツ科学部学生を対象として。中京大学体育学論叢, 57 (1.2), 59-72.
- 加藤圭司・堀内かおる（2010）平成21年度「教育実習に関するアンケート」結果報告。教育デザイン研究（1）, 123-130, 横浜国立大学教育デザインセンター。
- 教職課程コアカリキュラムの在り方に関する検討会（2017）教職課程コアカリキュラム。文部科学省。
- 松本奈緒（2014）事後指導における教育実習の省察（リフレクション）－保健体育教諭免許状取得希望

者の実習全体で学んだことと研究授業への着眼点を
中心として－. 秋田大学教育文化学部研究紀要教育
科学部門, 69, 43～60.

大塚貴史・吉田博紀・家田重晴・勝亦絃一 (2005) 保
健体育科教育実習における保健授業の担当時間及び
担当分野について. 中京大学体育学論叢, 46 (2),
99-113.

佐藤豊 (2017) 平成29年版中学校新学習指導要領の展
開 保健体育編, 明治図書.

内田雄三 (2013) 教育実習事前指導における指導内容
の検討－保健体育科模擬授業に関する学生の記述
内容の分析を通して－. 白鷗大学教育学部論集7
(2), 391-405.

内田雄三 (2015) 教育実習における学生の成長 中学
校保健体育科の授業実践を通して. 白鷗大学教育学
部論集9 (1), 179-199.